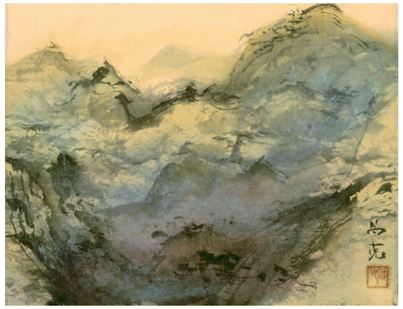
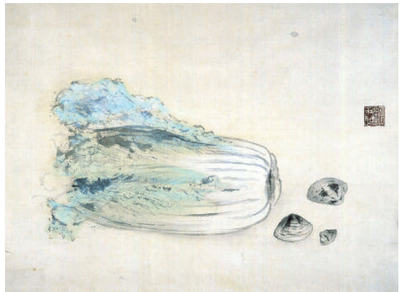
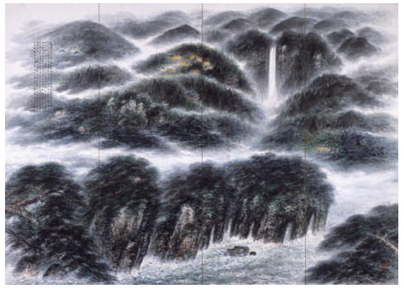


日高昌克《峻峰秋霽図》1955～59(昭和30～34)年頃　田辺市立美術館蔵



日高昌克《白菜》 1949(昭和24)年頃　田辺市立美術館蔵



渡瀬凌雲《仙境熊野》 1975(昭和50)年　田辺市立美術館蔵

渡瀬凌雲《清秋風味》 1963(昭和38)年　田辺市立美術館蔵

絵画と出会う「この一点!」

版画の表現

会場：熊野古道なかへち美術館
会期：2020年10月3日(土)～11月15日(日)

前川千帆（まえかわ･せんぱん／1888～1960）は、読売新聞社などで連載漫画を描くかたわら、木版画の制作に取り組みました。1919（大正8）年の第1回創作版画協会展に出品して、版画家としての創作活動を開始し、１９３１（昭和６）年に創立された日本版画協会展には第1回展から亡くなるまで会員として出品を続けました。官展や春陽会展にも入選を重ねた、近代の代表的な木版画家の一人です。

千帆は戦前から、各地の温泉を訪れて、その風景を作品にする『版画浴泉譜』のシリーズに取り組んでいました。図版の《椿》は、戦後に出版された『続々版画浴泉譜』に収められている和歌山の温泉地の情景の一つです。椿温泉（白浜町）の老舗旅館の縁側にたたずむ若い女性の姿が、穏やかな青い海を背に描かれています。画面奥にある島は、当地のシンボルである蓬莱島と思われます。

椿温泉は1960（昭和35）年頃から周辺が開発され観光地化してゆきますが、千帆が訪れたのはそれよりも前で、長期滞在の湯治客が大半の頃でした。千帆のエッセイには「椿温泉は療養の客多く、大半自炊の人。早朝庭を掃く老夫人。縁側に世帯道具を並べた部屋。秋刀魚を焼く女。」と当時の様子が綴られています。

今年は千帆が亡くなって60年を迎える年になります。この機会に、10月から開催の小企画展「版画の表現」で、上記の《椿》を含む紀南地方の温泉地を描いた7点を紹介します。

（学芸員　知野　季里穂）

前川千帆《椿》 1952(昭和27)年　田辺市立美術館蔵

田辺市立美術館へのきもち㉓

現在私は、紀南地方を主なエリアとする新聞『紀伊民報』で週に１度、金曜夕刊掲載の「紀伊文化」を担当しています。田辺市立美術館や熊野古道なかへち美術館には、展覧会やイベント開催の際にうかがって、スタッフの方々にも度々取材させていただいています。

今回、美術館広報紙への執筆のご依頼を頂いて、記事出稿のためにしばしば美術館にお邪魔してはいるものの、一体何が書けるのか非常に不安な気持ちになりましたが、素直な私の「美術館へのきもち」を書かせていただこうと思いました。

文化関係の記事を担当して長くなり、振り返れば、さまざまな展覧会を取材してきました。最近では、故人から現役作家まで日本画家の絵本原画制作に焦点を当てた特別展「絵本にみる日本画」が強く印象に残っています。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために臨時休館を余儀なくされ、開幕が遅れたのは残念でしたが、田辺市生まれの稗田一穂の作品、昨年特別展が開催された女性画家、秋野不矩の作品などを通して、文学的、美術的な性格を備えた絵本の魅力を再発見することができました。

個人的な考えですが、美術作品の良さは、専門的な知識がなくても、視覚から入ってくる情報が直に心に訴え掛けてくる点だと思います。好きな作品の前に立ち、静かに鑑賞している瞬間、世界は自分と作品の一対一だけのような気がします。そのような貴重な「出合い」を与えてくれる美術館の存在に感謝しています。おかげで地元にゆかりのある画家の作品はもちろん、さまざまな作家の名作に接することができています。

美術館は作品を展示する場だけではなく、その美的空間を生かした、多彩なイベントを発信する場にもなっています。美術館が主催するコンサートを取材したときには、いつもと違う館の雰囲気を楽しむことができました。今はコロナ禍で難しいかもしれませんが、これからも、美術作品を鑑賞するだけでなく、地域の人々が気軽に芸術に触れることのできる場であってほしいと願います。

田辺市立美術館は来年３月末まで、照明設備の改修や開館２５周年記念展の準備、作品・資料の整理などのために休館とうかがっていますが、再開後の活動に期待を膨らませています。

熊野古道なかへち美術館は２０１８年に開館２０周年を迎え、小紙の文化面でも、これまでの歩みを振り返る記事を掲載しました。美術館の設計者は、金沢21世紀美術館（石川県）などを手掛けた世界的な建築家ユニット、妹島和世＋西沢立衛／ＳＡＮＡＡです。その建築がもつ魅力を活かした斬新な試みを、今後も取材してゆければと思っています。

田辺市の文化の拠点となっている美術館の「これから」を、市民の一人として大変楽しみにしていますし、記者として紙面を通じて、読者の皆さまに丁寧に情報発信し続ける義務を感じています。

（株式会社紀伊民報記者
蛭子　みどり）

本社デスクにて出稿中の筆者

田辺市立美術館NEWS　ORANGE Vol.33
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和2年10月1日

田辺市立美術館
〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

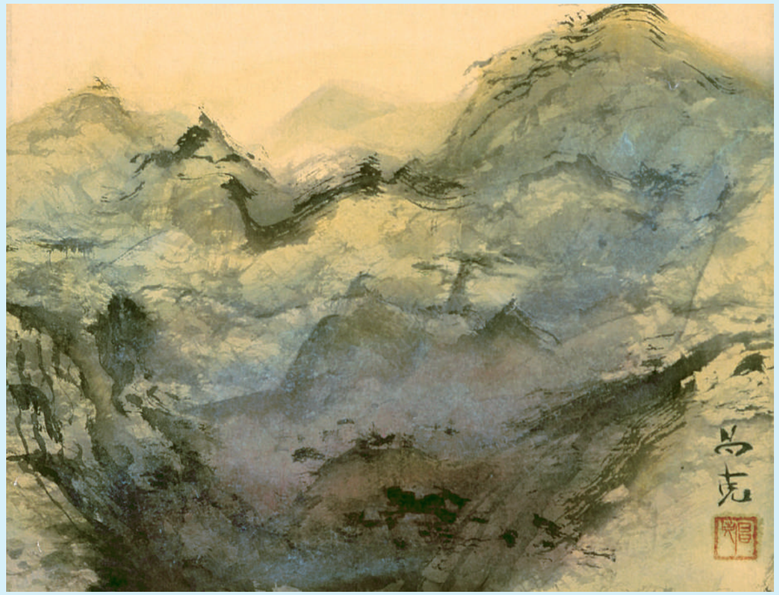
編集後記

今号の折込付録は、ちょっとしたメモにも趣きが出る「文人箋ミニ」の第二弾です。芸術の秋をお楽しみいただくアイテムになればと思います。
本館は10月から改修工事に入るため長期休館となりますが、分館では11月15日まで「版画の表現」展を開催して、皆さまのご来館をお待ちしています。　（F.O.）

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.33



日高昌克《峻峰秋霽図》 1955～59(昭和30～34)年頃　田辺市立美術館蔵

作品紹介　日高昌克《峻峰秋霽図》

日高昌克（1881～1961）は本業である耳鼻咽喉科医の傍ら、1914(大正3）年から和歌山市在住の日本画家、阪井芳泉（1880～1942）に師事して四条派の運筆を学び、1918(大正7）年頃からは富岡鉄斎（1837～1924）に傾倒し、南宗画･北宗画･浮世絵など様々な古画の模写を積極的に行って画家としての研鑽を重ねました。

また、野長瀬晩花（1889～1964）を通じて国画創作協会のメンバーと交流のあった昌克は村上華岳（1888～1939）とも知己であり、その作風に多くの影響を受けています。1937(昭和12）年、東京銀座で初の個展を開催、翌年には開業していた医院を長男に譲り、自身は画業に専念する決意を固めました。

1954(昭和29）年、昌克は和歌山県伊都郡笠田町（現在のかつらぎ町）の背山に住まいを移して画室をかまえました。長く患っていた関節リウマチスの悪化で、昌克はこの頃にはすでに歩くことが出来なくなっていたため、寝床の中から観賞出来る背山の風景を見ながら絵筆をとっていました。昌克はその著述のなかで「四季おりおりに移りゆく背山の風光は晴に宜く、雨に宜く、月雪に宜く、朝霧夕靄、悉くこれ皆好画材である。」と述べ、以降の作品の多くを「胸中の丘壑」と呼んで思いのままに描いていました。《峻峰秋霽図》もこの最晩年に描かれた作品中の一つです。

（主任　辰巳　充）